

あいづちとうなずきの形式と運用

- 山形県三川町における調査 -

宮寄 由美

1. はじめに

談話分析は、日本でも 1980 年代から盛んに行われるようになり、その重要な要素のひとつである「あいづち」の研究もまた盛んである。しかし、それらのほとんどは海外との比較や共通語話者を対象としたものであり、私見の限り、方言話者を対象としたあいづちの研究は黒崎（1987）の兵庫県滝野地方における調査のみである。

今回、山形県東田川郡三川町において方言調査を実施し、方言話者を対象としたあいづちの具体的なデータ分析を行うため自由談話を収集した。本稿は、その自由談話をもとに、方言話者におけるあいづちの表現形式と運用の実態を探るパイロットスタディとして位置づけられる。

2. 先行研究と本研究の分析の観点

方言話者を対象とした黒崎（1987）では、あいづちの定義を「聞いています」「分かりますよ」という信号を送る段階の応答表現であるとし、表現形式、出現頻度などを、年層差、男女差などの観点から明らかにしている。

しかし実際の会話では、より多くの信号が、あいづちとして送られていると筆者は考える。そこで、本稿では堀口（1988, 1997）をもとに、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義し、抽出されたあいづちを5つの機能¹⁾に分類することを試みる。

また、あいづちの役割を果たす非言語行動である「頭を縦にふる」行為、いわゆる「うなずき」もあいづちとし、5つの分類に含める。

以上の手続きをふみ、具体的には(1)言語形式としてのあいづちの特徴、(2)あいづちの出現頻度、(3)あいづちの機能別出現率、(4)あいづちのパターンと出現率、(5)うなずきの機能別出現率をみていく。

今回の三川町における調査では、収集できた談話数に限りはあるが、山形県庄内地方におけるあいづちの形式と運用の実態の一端を垣間見ることができると考える。

2.1. あいづちの5つの機能について

前述した通り、黒崎（1987）では、あいづちの定義を「聞いています」「分かりますよ」という信号を送る段階の応答表現としている。しかし、実際の会話においては堀口（1988, 1997）の分析するように、(1) 聞いているという信号、(2) 理解しているという信号、(3) 同意の信号、(4) 否定の信号、(5) 感情の表出などがあいづちの機能として認められ、それらが巧みに使い分けられながら会話が進行していくものと筆者は考える。そこで本稿では、松田（1988）による堀口（1988）の5分類の細分項目を考慮しつつ、下に記す5つの機能への分類を試みる。

5つの機能への分類を試みるにあたって留意しておかねばならないのは、1つのあいづちやうなずきに、必ずしも1つの機能のみが備えられているわけではないことである。そこで今回は、一番強く感じられる機能によって分類を試みることにした。また、機能づけが一人の考えだけに頼ることのないよう、筆者の他、もう一名による機能づけを行ない、二人の意見によって検討した。

機能1 聞いているという信号

- ・聞いていることを伝える
- ・話についていっている（追随している）ことを伝える

機能2 理解しているという信号

- ・話し手が伝えた情報の了解を伝える
- ・話し手の言おうとする気持ちがよくわかることを伝える
- ・当初理解できなかつたり、思い出さなかつたことを、理解したり思い出したりしたこと（知識の共有）を伝える

機能3 同意の信号

- ・正しいという同意を伝える
- ・共感を伝える
- ・納得を示す

機能4 否定の信号

- ・曖昧な同意を示す
- ・否定的な気持ちや疑いを示す

機能5 感情の表出

- ・感情の強い表出
- ・興味・関心を示す

以下、本稿における5つの機能への分類例をあげておく。上段には言語表現形式を時間軸に沿って記述し、中段には非言語行動（うなずき）と笑いを時間軸に沿って記述した。下段にはあいづち以外の発話について、標準語訳を記した。分類例では、わかりやすくするため、あいづちの部分に網掛けをし、横に機能番号をつけた。B5, B3とあるのは「調査概要」に示した話者番号である。

【分類例】

B5:		ウン1 *		ウン1			
B3:	イッター？ *	チョード	ヒロイサンノー…	アノー…			
	行ったらー？	丁度	ヒロイさんの…	あのー…			
B5:		フーン2 *		ンー1 *			
B3:	オカーサンダッデー	チョード	オグッデモラウドゴダッデー…				
	お母さんと会って	丁度	送ってもらうところだって…				
B5:		(笑5		ウン1 *			
B3:	エ？ ッテ	カンジダ# (笑	ジャ	ノッデグガッデ	イワレデー *		
	え？ って	感じて	じゃ	乗って行くかって	言われて		
B5:		(笑5		アー2 * *2			
B3:	オネカ° (笑	イシマスッデ	ヒロイケノ	アノ	チョード	ウシロノ	トーリオ
	お願いしますって		ヒロイケの	あの	丁度	後ろの	通りを
B5:	アー2		エー5 *2 *2*2	ヒロイサンワ	ドッチサ	リョーホー	
				ヒロイさんは	どっちの	両方	
B3:	アルイデダラ…	ウン3 *	ウン3				
	歩いていたら…						

【凡例】

- ・ガ行鼻濁音²は「°」で表わす
- ・°? : 上昇調を表わす
- ・… : いいよどみを表わす
- ・*/*/* : 頭を縦に振るうなずき1回分
- ・# : 聞き取り不能部分とその拍数を表わす
- ・< : 同時発話の始まる部分

3. 調査方法

自然なあいづちとうなずきを収録するためには、自由に会話をしているところを収録するのが一番であると考え、普段から仲の良い同性どうし4グループに自由に会話をしてもらった。インフォーマントについての詳細は別稿の「調査概要」に示したが、中年層（「調査概要」のグループ番号1, 3）と若年層（グループ番号2, 5）の4グループ8名である。それぞれ、自由に会話をしている様子を40分程度デジタルビデオカメラ1台とカセットテープレコーダー1台で収録した。

文字化した自由談話は、インフォーマントができるだけリラックスし、会話もはずんできたであろうタイミングのものを使用した。具体的には、会話開始から30分経過したところから3分間を抽出したものである。抽出された3分間の自由談話は、それぞれ1つのテーマに終始し、「同窓会の話」（中年男性グループ）、「新婚生活の話」（若年男性グループ）、「町の祭りの話」（中年女性グループ）、「結婚式の話」（若年女性グループ）などの「雑談」³であった。どれも2人がすでに共有している情報を思い出しながらかつ話し、といったスタイルがとられているため、話題によってあいづちの出現が左右されることはないものと考えられる。

4. あいづちの形式と運用

はじめに、5つの機能へ分類されたあいづちの形式とその頻度を、表1から表4に示す。表1から表4の凡例は表のあとに記すことにする。ここではその見方の例を示しておく。

【例】

		共起したうなずき			
	出現形式	出現数	*	**	*3以上
機能3	ンー	11	3	3	1(*3)

- ・機能3出現形式「ンー」／出現数11例
- ・うち、1回のうなずきが共起したもの3例／2回のうなずきが共起したもの3例／3回のうなずきが共起したもの1例

今回、例えば「ンー」と単独で出現するものと、「ンーンーンー」と続けざまに出現するものが同じ機能に分類される場合があった。これらを今回は「ンー」を1回「ンーンーンー」を3回と数えることにより、そこにより強い意味があることを分析に反映させていくことにする。

表1 中年男性

機能	出現形式	出現数	共起したうなずき	
			*	*3以上
機能1	アー	4		
	ウン	4		
	ンー	5	1	
機能2	ア	1		
	アー	1		
	ウン	1		
	うなずきのみ	1	1	
機能3	アー	3		
	ウン《…》	4	2	
	ホーン	1		
	ンオー	2		
	ンダッケノ	1	1	
	ンナンモノー	1	1	
	ンー	2		
	&ヒトリモンダ (独り者だ)	1		
	笑	1		1(*5)
うなずきのみ	2	2		
機能4		0		
機能5		2		
	ア	1		
	アー	1		
	@コジクタクシー? (個人タクシー?)	1		
	&タイヘンダヤ (大変だや)	1	1	
	笑	2		

表2 若年男性

機能	出現形式	出現数	共起したうなずき	
			*	**
機能1	ンー	2	2	
機能2	アー	3	2	
	ウーン	2	1	
	ウン	1	1	
	ゾー	1		
	ゾーカ	1	1	
	ハイ	3	2	
	ンアー	1		
	ンダ…	1	1	
	ンー	6	4	
	¥コーダロノー	1		1
	&シュッチョー (出張)	1		
	&ナイデスネ	1		1
	うなずきのみ	4	4	
機能3	アー	1		
	ウーン	3		1
	ウン	1		
	ゾー	1		
	¥ゾーナンスヨネ	1	1	
	ダーノー	1		
	ンアー…	1		
	ンー《…》	3	3	
	¥¥コミマス	2	2	
	スイマセン	1		1
	&スムドゴロ (住むところ)	1		
	ツルオガノ (鶴岡の)	1	1	
	ドモ	1		1
うなずきのみ	3	3		
機能4	アー…	1		
	ウーン	2		
	フン	1		
	ンアー	1		
	&アズミムラッデ(笑) (アツミ村って)	1		
	&モンゼン (門前)	1		
機能5	ア	2		
	アー	1	1	
	エ?	3		
	ン?	1		
	笑	5	1	
	¥サイッコーイイ (最高いい)	1	1	
	@ツルオガノ? (鶴岡の?)	1	1	
	&ナニカ°? (何が?)	1		

表3 中年女性

機能	出現形式	出現数	共起したうなずき		
			*	**	*3以上
機能1	ウン	2			
	ウン	3	2		
	ン	2	1	1	
機能2	アー	5	2		
	ウン	2			
	フーン	1	1		
	ン	14	2	4	
	ンダ	1			
	アソッカ	1			
	!ラグディイワッテカ? (笑でいいわってか?)	1			
	うなずきのみ	14	14		
機能3	アー	4			
	ウン	8	5		
	ウン	9	3	2	
	ソ	5			
	ソー	3			
	ンダ	12	3		
	ンダケ	1			
	ンダダダダ	1			
	ンダナー	1			
	ン	11	3	3	1(*3)
	ンダー	1			
うなずきのみ	8	8			
機能4	エー...	1			
	フーン	2			
機能5	ア	2			
	アー	5	1		
	エ?	5			
	エー	1			
	フーン	1			
	へー	1			
	ンダ?	1			
	ン?	1			
	笑	8			

表4 若年女性

機能	出現形式	出現数	共起したうなずき		
			*	**	*3以上
機能1	ウン	9	8	1	
	ン	1		1	
	うなずきのみ	8	8		
機能2	アー	6	1	1	
	アーハー	1	1		
	ウン	15	12	1	
	ン	4	2	1	
	笑	3	1		
	うなずきのみ	6	6		
機能3	ウン	2	2		
	ウン	3	2		
	ダヨ	1			
	笑	1			
	うなずきのみ	4	4		
機能4	うなずきのみ	1	1		
機能5	ア	3	2		
	アハー	1			
	エ?	2			
	エー?	1			
	フーン	1			1(*3)
	へー	3	3		
	笑	10	7		
	!クルクルクル	1			
	!ヘンダヨネ (変だよ)	1			

- ・言語として出現したあいづちを機能別に表記し、その出現頻度を記す。
- ・言語と共起せずに単独で出現したうなずきは「うなずきのみ」とし、その出現頻度を記す。
- ・記号「*」の数は、言語と共起した場合の頭の振りの回数を表わし、下に出現頻度を記す。
- ・共起したうなずきが3回以上の場合は、まず出現頻度を記し、括弧内にその頭の振りの回数を記した。例：表1機能3 「笑 1(*5)」

【1回の笑いが出現し、その1回の「笑い」に5回のうなずきが共起したことを示す】

- ・笑いが共起している場合は「(笑)」を記し、いいよどみがある場合は「…」を記す。
- ・笑いや上昇調、いいよどみの有無は異なりとしていないので、同じ機能、同じ形式にそれらが共起したもの、しないもの両方が確認された場合は《 》で括った。
- ・あいづち詞以外のあいづち的な発話はずぎのような性質をもつ。

& :繰り返し @:疑問詞的な語句 !:先取り *:返答

4.1. 言語形式としてのあいづちの特徴

本稿では、あいづちに使われる感動詞・副詞を「あいづち詞」と呼ぶ。またそれらのあいづち詞以外にも、相手の発話を先取りするものや相手への返答、直前の相手の発話を繰り返すもの、疑問詞的なものなどがあいづちの機能を果たすものとして出現しており、これらを「あいづち詞以外のあいづち的な発話」と呼ぶことにする。

今回調査した三川町における特徴的なあいづち詞として「ンダ」、「ンダナー」、「ンダケ」などの「ンダ」類がある。「ンダ」類は主に機能2と機能3に出現していることから、「理解」や「同意」を表わすあいづちであることがわかる。中年女性に出現した機能5にみられる「ンダ」類についても、上昇調で発話されていることから、今回は一番強く感じられた機能である「感情の表出」に分類したが、文脈からは、驚きと共に「理解」を示す機能を果たしているものと考えられる。

【出現例1「ンダ」類 中年女性】

B5:		ア ジブンジブンデ イガンロ? **2 *
		自分自分で 行くんでしょ?
B3:	イガネーゲ ウエナラバ イッダケドモ	ンー3 ***
	行かなかった 上(の子)ならば 行ったけれども	
B5:	カッテニー テューカン<ジデ アドー トモダジ<ドー	
	勝手にー って感じで あと 友達と	
B3:	ンダ3 ンダ3 ンダ3 <ン3ーン3ンー3 <ンー3	* * * * * *

その他に使われているあいづち詞として、「ア」「アー」「アーハー」などの「ア」類や、「ウン」「ウン…」などの「ウン」類、「へー」「フーン」「ホーン」や、「エ」「エー?」「エー…」などの「エ」類、「ンー」「ンオー」などの「ンー」類などがある。これらは機能を問わず、全体的に使われている。

ここで、主に機能2や機能3に出現が予想された「そう」、「そうです」などの「ソー」類の出現がほとんどみられなかったことにもふれておきたい。「ソー」類の出現は、若年男性に3例(4回)、中年女性に2例(8回)みられたのみである。若年男性の場合、C6が先輩であるC2に対し、会話中全体的に敬体を使用しており、「ソー」類の使用はすべてそのC6によるものである。中年女性においては、「(ラクデイイ)ワー」という発話をうけて出現したものである。今回収録した談話に、この「ワー」で終わる発話は他に1例確認されたのみであり、それに対してあいづちが出現したのは、こ

の「(ラクデイイ) ワー」の例のみであった。この「ワー」は、標準語における女性語の「ワ」であり、それを受けて標準語の「ソー」が出現したものと考えられる。

このように「ソー」類の出現は、標準語という意識の現われと、相手に対する敬意の現われと考えられそうである。しかし、今回はそのように断言できるほどの十分なサンプル数は得られなかった。おそらく、日常会話ではより方言形であるという意識の強い「ンダ」類が、標準語談話における「ソー」類の出現個所に現われると考えられる。

【出現例2「ソー」類 若年男性】

C6: <コムロ? コムロ?

 C2: <ソ³ン³... ソー³ナンスヨネ³ コミマス³ コミマス³
 * * * *

【出現例3「ソー」類 中年女性】

B5: ラグデイイワーッデクガ?

 B3: <## <ソ³ー³ソ³ー³ ヨカッタワーッテ カンジダゲドモ
 よかったわって 感じだけでも

機能別にみられる特徴としては、次のことが言える。あいづち詞以外のあいづちな発話は、「聞いている」信号である機能1にはみられない。「エ」類は、機能4「否定」にいいよどみを伴った「エー…」が一例のみ出現しているだけで、機能5「感情の表出」に出現が集中している。また、機能4と機能5に出現する形式には音声面に特徴があり、いいよどみや上昇調が伴われることが多い。

【出現例4「エ」類 若年女性】

C6: トモダジノ ケッコンシキサ イッタラー ジブンノ カミデ?

 C2: 友達の 結婚式に 行ったら 自分の 髪で? ウン1 ウン2
 * *
 C6: ナンカ チョット コー... ソフトクリームミテーナー...
 (笑

 C2: 何か ちょっと こう... ソフトクリームみたいな... エー?5
 (笑

4.2. あいづちの出現頻度

ここでは、出現したあいづちの形式の述べ数と異なり数⁴をみていく。

表5 あいづちの述べ数・異なり数 (回)

	中年男性	若年男性	中年女性	若年女性
述べ数	42	71	138	88
異なり数	13	29	21	17

3分間に出現したあいづちの述べ数はうなずきも含め、頻度の高い順に、中年女性、若年女性、若年男性、中年男性のグループとなっている。最も頻度の高い中年女性に比べると、最も頻度の低かった中年男性においてはその3分の1程度しか出現していない。異なり数をみていくと、若年男性がいちばん多く、次いで述べ数ではいちばん頻度の高かった中年女性、若年女性、中年男性のグループとなっている。述べ数に影響を及ぼしているのは、いわゆる「あいづち詞」以外の「あいづち的な発話」の多寡にある。中年男性、中年女性、若年女性においては、あいづち詞以外のあいづち的な発話は1、2例しか出現していないのに比べ、若年男性においては、あいづち詞以外のあいづち的な発話（出現例：スムドゴロ(住むところ)）の出現が多く確認されている。

【出現例「あいづち詞以外のあいづち的な発話」 若年男性】

C7: ウーン3 <スムドゴロ3

C1: エ?5スムドゴロッテ<コトデスカ? スムドゴロ ドウシマスカネー
住むところってことですか? 住むところ どうしますかねー

4.3. あいづちの機能別出現率

次に、表1から表4における「あいづちの出現数」をもとに、各グループにおけるあいづちの機能別出現率をみていく。

表6 あいづちの機能別出現率

	中年男性	(%)	若年男性	(%)	中年女性	(%)	若年女性	(%)
機能1	13	31	2	3	7	5	18	20
機能2	4	10	26	36	39	28	35	40
機能3	18	42	21	30	64	47	11	12
機能4	-	-	7	10	3	2	1	1
機能5	7	17	15	21	25	18	23	26
総あいづち数	42		71		138		88	

図1 あいづちの機能別出現率

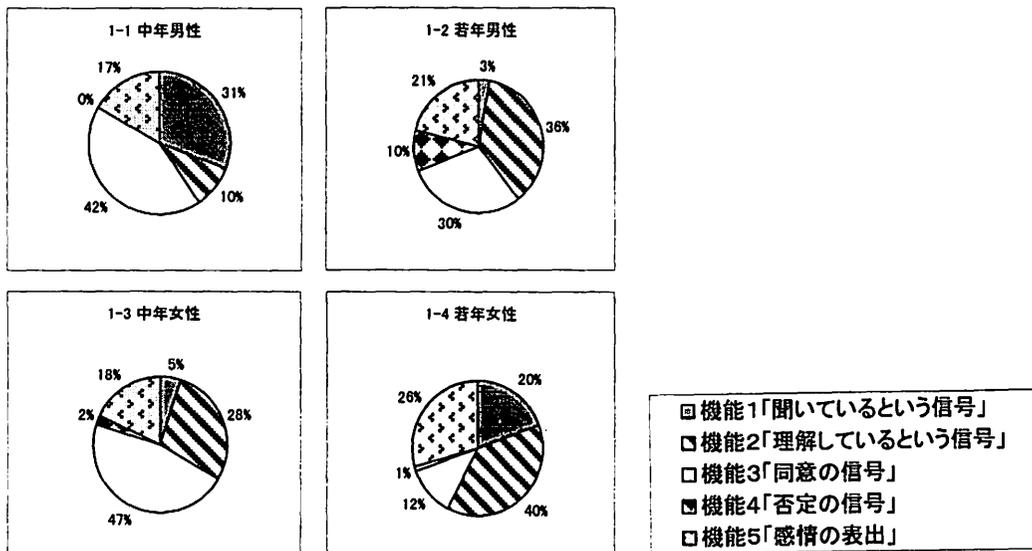


図1からそれぞれのグループにみられる特徴を以下に述べる。

- (1) 中年男性 最も高い割合を示しているのは「同意している」あいづちである。次いで「聞いている」というあいづちが31%を占め、他のグループに比べ最も高い割合を示した。今回「否定」のあいづちの使用はまったくみられなかった。
- (2) 若年男性 5つの機能すべてが出現している。最も高い割合を占めるのは、「理解している」あいづちであり、次いで「同意」のあいづちとなっている。「聞いている」というあいづちの割合が3%と他のグループと比較して最も低く、「否定」のあいづちの使用が他のグループに比べ最も高い割合を示した。
- (3) 中年女性 5つの機能すべてが出現している。最も高い割合を占めるのは中年男性同様「同意」のあいづちであり、次いで「理解」のあいづちとなっている。「聞いている」というあいづちの占める割合は、若年男性同様わずか5%と低い。
- (4) 若年女性 最も高い割合を示すのは、若年男性同様「理解」のあいづちであった。次いで「感情の表出」のあいづちである。筆者は若年女性の談話を聞いてにぎやかな印象をうけたが、それはこの「感情の表出」の出現率の高さにあるのではないかと考えられる。

以上の結果から、若年層においては中年層と比べ、「理解」の占める割合が「同意」のあいづちの割合に比べ高い傾向がみられた。今回のサンプル数からは断言することはできないが、若年層には「理解」はしていると伝えるものの、「同意」の信号までは伝えない、ということで親密さの中にも相手との距離を保つ傾向があるのではないかと考えられる。

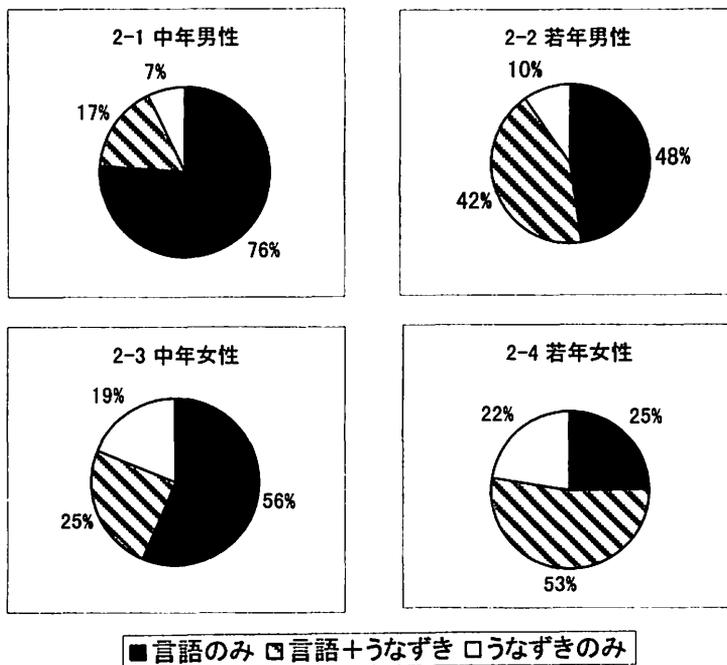
4.4. あいづちのパターンと出現率

今回抽出したあいづちには、「言語形式のみ」のあいづち、「うなずきのみ」のあいづち、「言語形式にうなずきが共起したあいづち」の3つのパターンが確認された。ここでは、非言語行動である「うなずき」の出現率についてみていくことにする。まずその3つのパターンの出現頻度を表7に示し、さらにその出現率を図2に示す。

表7 あいづちのパターンと出現頻度 (回)

	言語形式のみ	言語形式+うなずき	うなずきのみ	総あいづち数
中年男性	32	7	3	42
若年男性	34	30	7	71
中年女性	78	34	26	138
若年女性	22	47	19	88

図2 あいづちのパターンの出現率



- (1) 中年男性「言語のみ」のあいづちが全体の76%を占め、他のグループと比べいちばん高い割合を示している。非言語行動であるうなずきについては、「うなずきのみ」は7%と最も低く、「うなずきを共起させる」ものをあわせても、他のグループと比べ最も低い。
- (2) 若年男性「言語のみ」とうなずきの出現するあいづちがほぼ半数ずつの割合で出現している。
- (3) 中年女性 半数以上が「言語のみ」のあいづちで占められている。
- (4) 若年女性 非言語行動である「うなずき」が、それ単独で出現するものと、共起するものとを合わせ、75%を占め、他のグループと比べいちばん高い割合を示した。中年男性と比較すると、まったく逆の割合を示している。

以上のことから、中年層よりも若年層において、非言語行動である「うなずき」が出現する頻度が高い傾向がうかがえる。また筆者は、若年女性の談話を聞いて、にぎやかな印象をうけたと前述したが、そのような印象をうけた原因は、この非言語行動である「うなずき」の出現率の高さにもあるのではないかと考えられる。

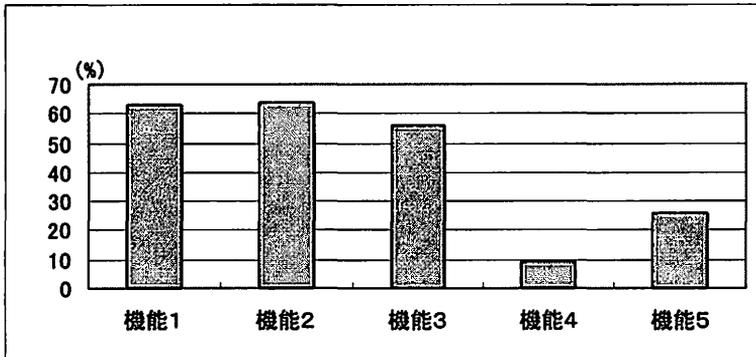
4.5. うなずきの機能別出現率

次に「うなずきのみ」と「うなずきが共起」したものの出現率には、機能別に違いがあるのかをみていく。表1から表4をもとに、特にうなずきの機能別出現頻度を抽出したものが表7である。しかし、表8からもわかるように、今回抽出されたうなずきの機能別出現数だけではグループごとに比較を行えるだけの量に達していない。そこで、図3に示すように4グループを合計したうなずきの出現率を概観していくことにする。

表8 うなずきの機能別出現頻度

全あいづち数	中年男性	若年男性	中年女性	若年女性
機能1	13	2	7	18
機能2	4	26	39	35
機能3	18	21	64	11
機能4	-	7	3	1
機能5	7	15	25	23
うなずきの出現頻度				
機能1	1	2	4	18
機能2	1	20	23	23
機能3	7	13	36	8
機能4	-	-	-	1
機能5	1	4	1	13

図3 機能別うなずきの出現率（全体）



うなずきの出現率は、機能2「理解している」あいづちにいちばん高く、次いで機能1「聞いている」あいづち、機能3「同意している」あいづちの順となっている。しかしこの3つの出現率は60%前後とそれほど差はみられない。その3つに比べると、機能5「感情の表出」におけるうなずきの出現頻度は低い。機能4「否定」のあいづちにおいては、1割程度しかうなずきは伴わないことがみてとれる。機能4「否定」と機能5「感情の表出」に伴う非言語行動の出現率が低かったのは、今回の調査でとりあげる非言語行動が「頭を縦に振る」ことに限定したためであると考えられる。機能5には今回は分析の対象としなかった「手をたたく」などのケースもみられたが、機能4については、うなずき以外のどの非言語行動も伴わないケースがほとんどであった。機能4や機能5においては音声面に特徴があり、上昇調やいいよどみなどが多くみられた。機能4ではいいよどみや笑いを伴うなどして、賛成に対する消極的な態度を示し、機能5では上昇調によって、相手への強い関心を示す場合が多い。

5. まとめ

今回の調査において収集できた談話の数は限りがあるため、本結論が三川町方言談話における特徴を示すといつていいものか断言はできない。しかし、今後の調査へのあしがりとなる調査結果が得られたものとする。以下に本調査結果をまとめておく。

言語形式の特徴としては、あいづち詞「ア」「アー」「アーハー」などの「ア」類や、「ウン」「ウン…」などの「ウン」類、「ヘー」「フーン」「ホーン」や、「エ」「エー?」「エー…」などの「エ」類、「ンー」「ンオー」などの「ンー」類などが確認された。これらのあいづち詞はほぼ全部の機能に出現しているが、「エ」類については上昇調を伴い「感情の表出」である機能5に出現が集中している。

また、三川町における特徴的なあいづちとしては、「ンダ」類が確認された。「ンダ」類は、主に機能2「理解」や機能3「同意」の機能をもつ。また、あいづち詞以外のあいづち的な発話として、相手の発話を先取りするものや、直前の相手の発話を繰り返すものなどがみられ、それらは若年男性に多く出現している。

3分間に出現したあいづちの頻度は、中年女性がいちばん高く、次いで若年女性、若年男性、中年男性であった。しかしその異なり数を見ると、若年男性がいちばん多く、次いで中年女性、若年女性、中年男性となっている。異なり数はあいづち詞以外のあいづち的な発話の多寡に関係し、異なりの比較的少ない若年女性、中年男性におけるあいづちは、ほとんどがあいづち詞によるものである。

5つの機能への分類を試みた結果、今回の調査からは年層によって異なる傾向が確認された。中年層においては、機能3「同意」の出現が目立っている。機能1「聞いている」の出現が多いのが中年男性であって、少ないのが中年女性である。若年層においては、機能3「同意」よりも機能2「理解」の出現が多くなっており、機能1「聞いている」あいづちの出現が多いのが若年女性で、少ないのが若年男性であった。親しい間柄において、中年層が相手に「同意」を示す割合が多いのに比べ、若年層においては、「同意」には至らない「理解」を示すにとどまっている。このことから、若年層においては親しい間柄であっても、相手に「理解」は示すものの、むやみに「同意」までは示さないことで、距離を保つ傾向があるものと考えられる。しかし、今回のサンプル数からは断言できない。

本調査では、あいづちのパターンとして「言語のみ」、「言語にうなずきが共起したもの」、「うなずきのみ」の3つが確認された。その出現頻度をみていくと、年層によって異なる傾向が確認された。中年層においては、「言語のみ」のあいづちの出現率が高く、若年層においては「うなずきのみ」もしくは「うなずきが共起」したものの出現率が高くなっている。特に、中年男性と若年女性ではまったく逆の出現傾向を示した。

非言語行動に着目した「うなずきのみ」もしくは「言語にうなずきが共起したもの」の機能別出現頻度は、「聞いている」、「理解」、「同意」を示す機能1、2、3においてはほとんど違いはないものの、「感情の表出」を示す機能5においてはやや低くなっている。「否定」を示す機能4においてはもっとも低く、9%にとどまった。このことは、今回取り上げた非言語行動を「頭を縦に振る行為」に限ったためではないかとも考えられる。今回の談話資料から、機能5においては「手をたたく」などの非言語行動が確認されたが、機能4においてはうなずき以外のどの非言語行動も確認されなかった。

以上の調査結果は、方言話者を対象としたものであるが、今後、標準語話者や他の地点の方言話者における同様の調査によって、あいづちの表現形式とその運用の実態を地域差の面からもさらに解明されていくべきであると考えます。

また本稿ではふれていないが、あいづちの出現をうなぐす言語や非言語行動として、山形県庄内地方に特徴的な終助詞、笑い、いいよども、うなずきなどがその表現として出現していた。それらの運用のされ方を明らかにしていくことも興味深い課題である。

最後に、機能づけをするにあたって、吉川明日香さんにご協力いただいたことを感謝申し上げます。

注

- 1 松田（1988）において、堀口（1997）のあいづちの5つの機能を細分化するとともに、6つ目の機能である「間をもたせる」機能が追加されている。しかし本稿ではあいづちを「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義することから、この「間をもたせる」機能はあいづちではないと判断し、今回は含めなかった。
- 2 今回、ザ行、ダ行、バ行の入りわたり鼻音は確認されなかった。
- 3 黒崎（1987）では「雑談」と「相談」の話題差によってあいづちの出現率が変わってくるという報告があるが、今回抽出された自由談話はすべて「相談」する内容は含まれておらず、また、特に深刻な話がされていたわけでもなく、「雑談」であると判断される。
- 4 表1～4の凡例にも示したように、「いいよども」や「笑い」「上昇調」の有無は異なりと認めていない。

参考文献

- 井上史雄（1994）「Ⅱ章 鶴岡方言の音韻」国立国語研究所編『鶴岡方言の記述的研究 - 第3次鶴岡調査 報告1 - 』
- 沖裕子（2001）「談話の最少単位と文字化の方法」信州大学人文学部文化コミュニケーション学科編『人文科学論集』35号
- 黒崎良昭（1987）「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野地方について—」『国語学』150
- 堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号
- 堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子（1988）「対話の日本語教育学 - あいづちに関連して - 」『日本語学』vol.7 No.13
明治書院

（みやざき ゆみ・東京都立大学大学院生）